

Interview

能楽師狂言方
和泉流

野村 太一郎

亡き父から最期の言葉 伝統継承を目指す若き才能



のむら・たいちろう 故八世野村万蔵（五世野村万之丞）の長男。祖父は人間国宝の野村萬。二世野村萬斎に師事。1993年、「狢猿（うつぼざる）」で初舞台。1995年、五世万之丞の万蔵家継承記念会の折、「伊呂波」で初シテ※。同年、南フランス・トゥールーズ・ギャロンヌ劇場での万蔵家狂言公演では「狢猿」と小舞などで参加。「奈須と市話（なすのよいちのかたり）」「三番叟（さんばそう）」「釣狐（つりぎつね）」「金岡（かなおか）」を抜く。奈良県吉野郡NEOLD PRIVATE HOUSE内「NEOLD能楽堂」監修。全国の能・狂言の公演から招聘を受ける。ドイツのハイデルベルク大学、フランスのストラスブール大学にて狂言のワークショップおよび公演にも多数参加。2019年にはモスバーガーCMなどメディアにも出演。2022年、能・狂言「鬼滅の刃」（監修：大槻文蔵（能楽シテ方観世流人間国宝）、演出：野村萬斎（能楽狂言方と泉流））に狂言方として出演。現在、情報経営イノベーション専門職大学 客員教授、青山学院大学 非常勤講師、桜美林大学 非常勤講師を務める。公益社団法人能楽協会会員。

※「シテ」とは能または狂言の主役を意味する。

「能」「狂言」は、室町時代から途絶えることなく演じられてきた日本を代表する舞台芸術である。その原型は、奈良時代に大陸から日本に伝わり、平安時代の猿楽を経て、室町時代に「狂言」として定着し、その後、変遷しながら現代に息づいてきた。古くは豊臣秀吉や徳川家康など多くの武将が愛し、現代ではユネスコの無形文化遺産に登録されるなど、海外からも高い評価を得ている。

野村太一郎氏は、狂言方と泉流の能楽師で、父は故八世野村万蔵（五世野村万之丞）、祖父は人間国宝の野村萬（七世野村万蔵）と、代々伝統を継ぐ名家の生まれだ。八世野村万蔵は、能楽師として活躍しながら、NHK大河ドラマの芸能考証、1998年の長野パリンピック冬季競技大会では閉会式の演出を担当し、研究者としても客員教授等を務めるなど、多彩な活躍を続けていたが、44歳の若さで早世。太一郎氏はその父の遺志を継ぎ、能楽師の道を歩む。22年6月4日に父の追善公演である「第2回野村太一郎 能楽特別公演」を東京・銀座の観世能楽堂で主催し、父がグリム童話をもとに創作した新生狂言「白雪姫」に太一郎氏が新たな演出を施して、成功裏に幕を終えた。現在は父のいかにあたる二世野村萬斎に師事し、日々芸に邁進する太一郎氏に、「父であり師である故八世野村万蔵への思い」「新作能『白雪姫』『伝統芸能としての能楽の展望』『伝統芸能の視点から歯科医療』などについてを伺う。

——お父様（八世野村万蔵）は、能楽師狂言方として活躍しながら、多くの功績を残していますが、その当時、太一郎さんの目にはどのように映りましたか。

多忙な人間であったという印象を強く持っています。地方公演などが多く、なかなか父と一緒にいる時間がありませんでした。家族としてだけでなく弟子としても、一緒にいる時間は多くなかった印象です。通常、狂言の稽古は、一対一の対面で行いますが、移動中の車中で済ませてしまうこともあり。また、幼少の時は、私生活の姿勢がそのまま舞台に出ると言われていたので、お箸の持ち方、言葉遣いについて、非常に厳しかった印象です。父は能楽師の枠にとどまらず、総合エンターテ

イナー的な職業を目指していたようで、物事のその先を見つめ、より深く突き詰める人に見えました。今、父の過去の作品を掘り返し、リメイクしていますが、最近特に偉大な人物だったと思うようになりました。父でもなく、師匠でもなく、どこか憧れの人みたいな感じかなと思います。

——お父様が44歳の若さで亡くなり、14歳で能楽師として生きていくことを決意されたことですが、その時の心境をお聞かせください。

私が中学2年生の時、一度だけ病床の父と面会する機会がありました。そこで最期にかけられた言葉は「できれば狂言を続けてほしい」「万之丞という名跡をお前に継

とです。もちろん伝統は守りつつ「ごは左足から出さない」ということなどに常に疑問を持ちながら稽古をし、本質を追い求めています。

——二世野村萬斎氏に師事し、万作の会の同門としておよそ6年の歳月が経ちました。太一郎さんにとって萬斎氏、万作の会は、どのような存在でしょうか。

当りきつての狂言師 萬斎先生に教えるを請うことができた、万作の会の諸先輩方と芸に邁進し、狂言のことのみ考えて日々を過ごせるのは、非常に恵まれた環境だと思います。大変な部分もありますが、能楽師の先生や諸先輩方の胸を借りることができ、一つひとつのことが、自分にとっては芸の上達に繋がっていると感じています。そしてなによりも、同じ釜の飯を食う、苦楽を共にできる仲間がいることに、感謝しかありません。

——今回上演された新作能『白雪姫』は、お父様が遺された新生狂言「白雪姫」の原案を基に、萬斎氏監修の下、太一郎さんが能楽式に改作されたことですが、お父様の遺作を手掛けたことについてお聞かせください。

父が残した遺作は多くありますが、その中でも「白雪姫」は、私が小学生のときに鏡の精役で出演した作品です。この初演を見ていた能楽師シテ方観世流の坂口貴信さんから「面白い舞台」と感想をいただいたことから、新作能として作り直す構想を練りました。父の遺作を自分なりにキャスティング、リメイクすることが恩返しかなと考えました。また「白雪姫」では、父が演じていた女王役を自分が担い、父への思いを馳せながら演じました。本番まで多くの方にご協力いただき、また一つ成長できたなど思っています。

——狂言方として出演される萬斎氏演出の作品「鬼滅の刃」に向けての意気込みを教えてください。

今回、狂言方として、師匠である萬斎先生、同門の野村裕基氏とともに共演させていただきます。幅広い年代に支持されている人気作品で、今回、多くの「鬼滅の刃」ファンの方々が観に来られると思いますので、これを機に狂言や能に関心を抱いていただけたら嬉しく思います。

——伝統を現代に伝え、未来へ継承していくために考えていることをお聞かせください。

能楽はその当時の日本の背景や、習わし、風習を表現しています。その風情や良さを、現代の人たちがどこまで求めているのか考えることがあります。多くの人が日常的に和装をすることがない今、伝統芸能の良さをいつまで理解してもらえるのかというところが、怖いところでもあります。また、公演にみえるお客様の高齢化も進んでいます。若い方にも能楽に関心を抱いていただき、過去から未来へ橋渡しを図ることが課題ではないかと思っています。

現在、新型コロナウイルスの感染拡大で、海外公演が行えませんが、今後、企業や団体とタイアップして企画したいと思っています。今、インバウンドが少しずつ戻ってきて、私たちも海外に足を運びやすくなっています。終息がいつになるかわかりませんが、将来的には「白雪姫」な

ど、視覚的に分かりやすく面白いもので、能楽を広めていきたいと考えています。

——伝統芸能の視点から、歯科医療について一言いただけますか。

診療所には、歯科衛生士、歯科助手、受付と、いろいろな役割を持った方がいらっしゃいます。その際に、診療する前のところからどのように接して、患者さんの治療まで流れていくのかが重要だと思います。例えば、受付対応一つとってもそうです。私たちの業界では、楽屋にお弁当を届けてくださる方や、さまざまな関係者が出入りしますが、きちんと丁寧な挨拶をして、しっかりと対応をするように、とよく言われます。やはり見えないところへの気配りこそが、「本物」か「否」かを左右するところなんです。受付で冷たい態度にさらされると、次は診てもらおうのをやめようかなと考えるしまうのではないのでしょうか。

——座右の銘を教えてください。

私の父の座右の銘でもあります「大きくゆつくり遠くをみる」です。明るく楽しく、これからも舞台を務めたいと思います。

——本日はありがとうございました。



写真：新作能「白雪姫」で女王を演じる野村太一郎氏